

收容所内は、主戦闘員と非戦闘員との二つに分けられていた。

宮川とわたしは主戦闘員の方へ入れられた。そこにはすでに二人の先客があった。

一人はゼロ戦(零式戦闘機)の搭乗員で三等下士官の藤田保兵曹。

一式陸攻(双発爆撃機)の護衛でついできたところ、敵機と遭遇、空中戦になり燃料タンクに被弾し、気付いたときにはすでに燃料がなくなっていたという。決死の覚悟で不時着を試み、絶海に突っ込んだ。機体は破損したが、さいわい怪我はなく、気絶して浮いていたところを運良くというか、運悪くというのか、敵に拾われてしまった。

もう一人は警備隊の福田一水(一等水兵)で応召兵だった。

ガダルカナル島に近い島の警備隊員に派遣され、隊員は三十五名いたそうだ。

敵の急襲にあい左膝頭を貫通、死んだ仲間の下敷きになり、気を失っているところを捕まってしまった。

この時、隊員の遺体は三十三名しかなく、一名が消息不明となり行方がわからない。

この一名は、以前から現地人の酋長の娘と噂があったというのだが、娘は事前に敵の襲撃を知っていて男を連れ出し、この襲撃のときにはすでに隊にいなかったのではないかということだった。

主戦闘員グループはたったこの四人だけであった。

一方の非戦闘員たちは、徴用工員が多く、ガダルカナルに飛行場をつくるために送り込まれた第十一設営隊と十三設営隊の生き残りの人たちだった。

彼らは内地の軍需工場から無理に引き抜かれた人たちで、公共の仕事をしていた役職者から技術者、電信電話関係者、大工さん、兵役前の十八才の若者まで、いろいろな職種の人たちが六十人ぐらい入り交じっていた。

飛行場設営工事は、海軍の兵役を終えた予備将校を責任者に、彼らを部下にして働かせた。今のようにつルドーザーもなく、スンプターは、もっとなどで土方のような作業を毎日させられていたらしい。

米軍上陸後の彼らの行動は、昼間動く、敵の銃撃にあつので、夜半食べ物を探しにさまよつた。困とも知らずに拾った椰子の実には細い針金がついていて、拾っていくと仕掛けの鳴子が鳴つた。それを合図にあかあかと照明がつき、「動くな！動くと撃つぞー」で捕まってしまう人たちだった。

この設営隊の中には、明大を中退した中谷という隊員がいた。彼は英語が少々できるといので、通訳がわりをさせられていた。

われわれ四人の所へもきて、尋問の手伝いをさせられていた。みな勝手な偽名を使っていたので、私はとつさに田中と名乗った。

非戦闘員たちは、日本軍が死闘をくりひろげたルンガ岬へ毎日狩り出されて、戦死した多くの兵士の死体処理をさせられていた。

彼らは穴を掘らされ、海岸一面に重なるようにして斃れている。おびただしい数の腐乱した死体を、トタン板に棒でなん体も転がして乗せ、引きずってきては穴へ放り込んで埋めたと話していた。昨日は九十体、今日は八十体を処理したとか。

米軍は、日本のネイビー（海軍の兵隊）とソルジャー（陸軍の兵隊）は命がけてやるので、なにをするか分からないと恐がっている様子だった。われわれを外へは出さず、仕事もさせなかった。

福田一水は一日一回治療を受けていた。治療といっても工員さんが傷口にマーキョロのようなものを塗ってくれるだけだった。

われわれは栄養失調のため、満足に歩けないので、日がな一日床にころ寝していた。食事が運ばれてくるとその時だけ起き上がった。

日中なにもしないでいても、じつとり汗がでてくる暑さであるが、内地の暑さとはちがいに湿気がないので、椰子の木陰に入れば風もあり過ごしやすかった。その代り、熱帯特有のモンスーンのため夜中はぐっと冷え込んだ。

つづく

次回第二十一回、第二十二回は四月二十七日（火）の予定